

### 3 伝小口若宮社・若宮陵付近出土の常滑焼

相澤 裕子

#### (1) 寄贈された常滑焼

経緯 2017年10月10日所有者の伊藤福英氏が文化財センターへ壺を持参された。調査のため同年11月30日まで借用し、水洗い、実測、写真撮影を行った。発見の経緯は伊藤氏によると、叔父が子どもの頃（約90年前）に秋葉区小口観音山山頂にて掘り出し、発見時は口縁部の欠損はなく、蓋をするように石が載せてあり、内部には少量の土があったという。

2020年12月11日付で伊藤氏より物品寄附申込書の提出を受け、同23日付新文セ第169号の2で物品寄附受理通知書を発送し手続きを完了した。

出土地 新潟市秋葉区と五泉市との境、能代川左岸の新津丘陵北東に位置し、標高約63mの地点、通称：観音山の最高所にある若宮社・若宮陵付近と伝えられている。若宮陵の由来については後述のとおり複数の文献に記載されている。現在は小口観音山公園として整備され、参道より石階段と丸木階段を約160段上ると若宮陵に到着する。新津丘陵内に整備されている「木もれ陽の遊歩道」の小口ルート上に位置している。

遺物 口径21.3cm、底径11.6cm、器高38.6cm。口縁部を一部欠損するが、発見時には口縁部の欠損はなかったという。肩部に約3cm×1cm弱の長方形の穿孔があるが、出土後のものかは不明。口縁端部は強めになでられた結果、顕著な段が生じ、摘み出されたように仕上げられている。口縁～頸部は内外面ヨコナデ、頸部内面にタテナデ、肩部外面ヘラナデ、肩部以下は刷毛状工具による調整後に一部ヨコナデ、下部に粘土紐積み上げ接合痕が残る。底部から体部への立ち上がり部にヘラ状工具によるオサエ痕がみられる。内面は全面的に丁寧なヨコナデ。底部外面に径5mmの小石が付着する。色調は暗褐色～灰褐色。

口縁部と体部の形態より12世紀後半に位置付けられる〔赤羽ほか1994〕。

出土状況は明確ではなく不明な点が多い。用途として考えられることは経塚や骨蔵器があげられる。経筒や経の存在は確認されていないが、経筒外容器として用いられた可能性が考えられる。また、骨蔵器として用いられた可能性もあり、いずれにしても用途については不確定である。

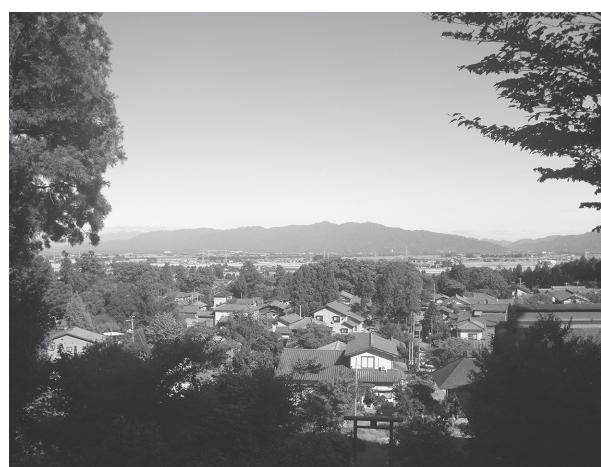
近隣の経塚としては、現存していないが直線距離約8km東には横峯経塚（阿賀野市寺社）があり、珠洲焼が出



図1 位置図 (1/10,000)



出土地周辺 若宮社（左）と若宮陵（右）



若宮社・若宮陵から横峯経塚・五頭山方面を望む

土した。新潟県内で確認されている経筒外容器に常滑焼はみられず、珠洲焼の割合が高い。経筒と共に経筒外容器として明確な常滑焼は東北2か所、関東4か所、中部6か所、北陸（越前）1か所が確認されている〔村木2003〕。常滑焼を経筒外容器として用いるのは中部地方・関東地方に多く、次いで東北地方となる。12世紀後半において珠洲焼の流通圏である県内に常滑焼が流通することは少なく、出土地の性格など不明な部分はあるが資料的価値は高い。

## (2) 文献にみる若宮社

若宮社については、承久の乱（1221年）により佐渡島へ配流となった順徳天皇を追って越後に来た第2皇子と深い関係にあることが記載されている。以下に文献の内容を部分的に紹介する。

『風土記 下条組 小口村』文化元（1804）年（『越佐叢書第18巻1981年』）

- ・観音山絶頂を切り均した際に土中より空瓶壺つ掘り出された

小田島允武『越後野志』文化12（1815）年 歴史図書社  
1974年

- ・貞応2（1223）年順徳天皇の皇子廣臨親王が小口村にて自害

- ・小口村に祠を建立し神とし崇め祭る

- ・寛喜元（1229）年新たに神廟を造営し若宮三社大権現と号す

- ・村上城主榎原式部太輔政倫（在任1667～1683年）の領地となっていた頃、年月が経て親王の墳墓の所在が明らかではなくなっていた

- ・墓を掘りあて、椁中に甕棺あり

- ・椁の外側は腐朽しているが、内側は朱漆が塗られ腐朽していない

- ・椁の外は上下四方を太刀・小刀により包むように埋め置く

- ・その祠廟を墓上に移し祭る

『中蒲原郡誌卷二十六』大正14年

- ・安永元（1772）年、觀音堂の再建のため山頂を掘ると宮の名が彫られた鉄札が見つかる

- ・さらに掘ると長さ9尺余り、横幅5尺余りの石槨あり

- ・その中には剣1、冠1、笏1、白瓶1、太刀24・5口

このように小口若宮社については、複数の文献に記述されており、内容に共通点が認められる。今回の常滑焼の壺の出土地はこれらの記述の対象地と重なっており、記述と壺が埋められた背景を積極的に結びつけることは難しいが、興味深い内容である。

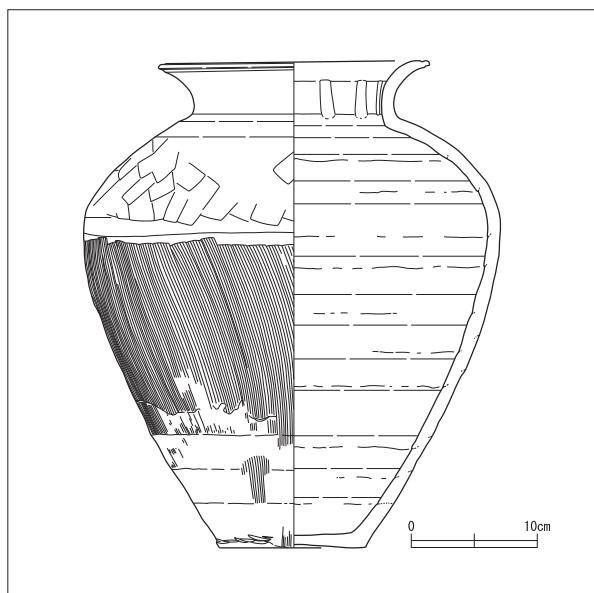


図2 常滑焼実測図



常滑焼壺

## 引用・参考文献

- 赤羽一郎ほか1994『全国シンポジウム 中世常滑焼をおって 資料集』日本福祉大学知多半島総合研究所  
村木二郎2003「東日本の経塚の地域性」『国立歴史民俗博物館研究報告第108集』国立歴史民俗博物館